

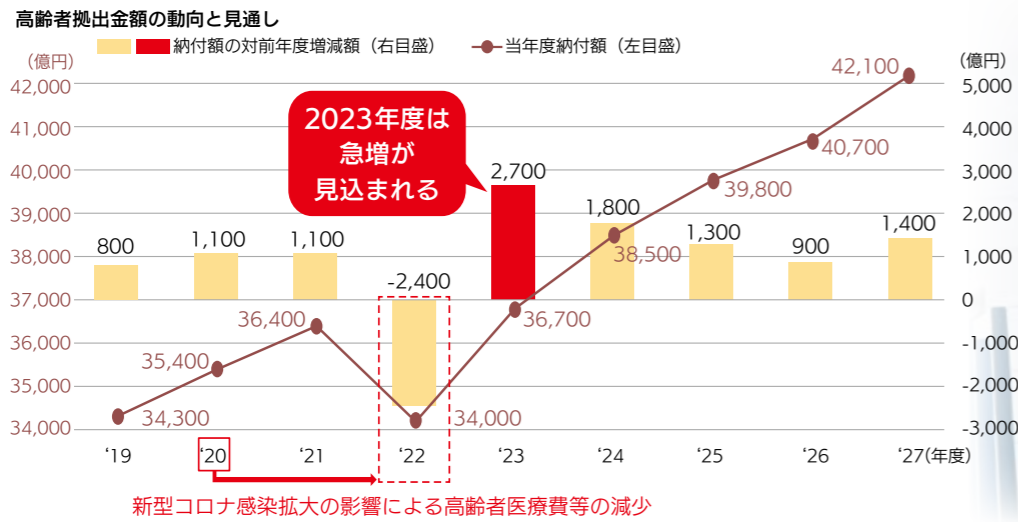
団塊世代の75歳到達により、後期高齢者支援金が増加局面に

IBM健保組合の財政健全化も急務に

2023年度以降は、今年度の一時的な拠出金減少の反動に加え、団塊世代の75歳到達により後期高齢者支援金が増加局面を迎えるため、高齢者拠出金が増加することは必至で、多くの健保組合で急激な財政悪化が予想されます。

IBM健保組合の財政状況は、本誌でもお知らせしてきた通り、2021年度決算、今年度予算いずれも経常収支で赤字となっています。そこで、2023年度以降の収支について現段階での見通し等についてお知らせいたします。

●高齢者拠出金が増加（健保連）



健康保険

2023年度は赤字拡大の見込み

健保連が発表した2021年度の決算見込みによると、経常収支は▲825億円、2013年度以来8年ぶりの赤字となり、5割を超える健保組合が赤字となっています。2022年度は一時的な高齢者拠出金の精算戻り等の支出減により、収支が一時的に改善することも見込まれますが、2023年

度は後期高齢者の増加と、2020年度分の精算による一時的抑制の反動で、赤字の拡大が見込まれています。

当健保組合の収支においてもきわめて厳しいものになることは避けられない状況です。

●健保組合財政の見通し

	2021年度決算見込	2022年度(推計)	2023年度(推計)
保険料収入	低迷(1.0%)	増加(3.4%)	低迷(0.7%)
保険給付費	大幅増(8.7%)	増加(3.0%)	増加(3.9%)
高齢者等拠出金	増加(3.0%)	減少(▲6.8%)	大幅増(7.9%)
経常収支差引額	▲825億円	2,100億円	▲1,700億円

()内は対前年度伸び率

「健康保険組合の令和3年度決算見込と今後の財政見通しについて」(健保連)より作成

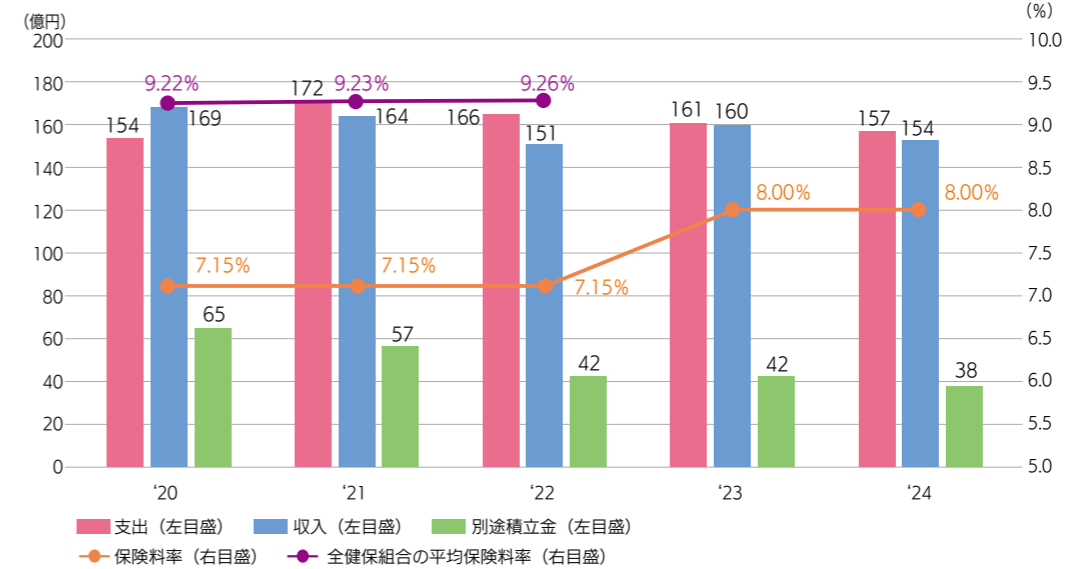
収支の維持が課題

当健保組合は2020年度決算では、支出抑制の継続的な活動と、新型コロナウイルス感染症による受診控えから経常収支において約6億円の黒字となりましたが、2021年度決算では約17億円の赤字、今年度予算では、納付金の一時的な減少にもかかわらず約15億円の赤字となっています。2019年度以降段階的な保険料率の引き上げを予定していましたが、財政状況等について検討を

行いながら、現行の71.5/1000に据置いてきました。全国の多くの組合が保険料率を引き上げているなか、極めて低い料率となっています。

これまでは不足分を補填するために、別途積立金を取り崩して繰り入れてきましたが、別途積立金は年々減少しており、現行の保険料率では、数年のうちに予算を編成できなくなる状況が予想されます。

●IBM健保財政の推移 (注：2023年度以降は保険料率を改定した場合のシミュレーション)



介護保険

高齢化により介護納付金が増大

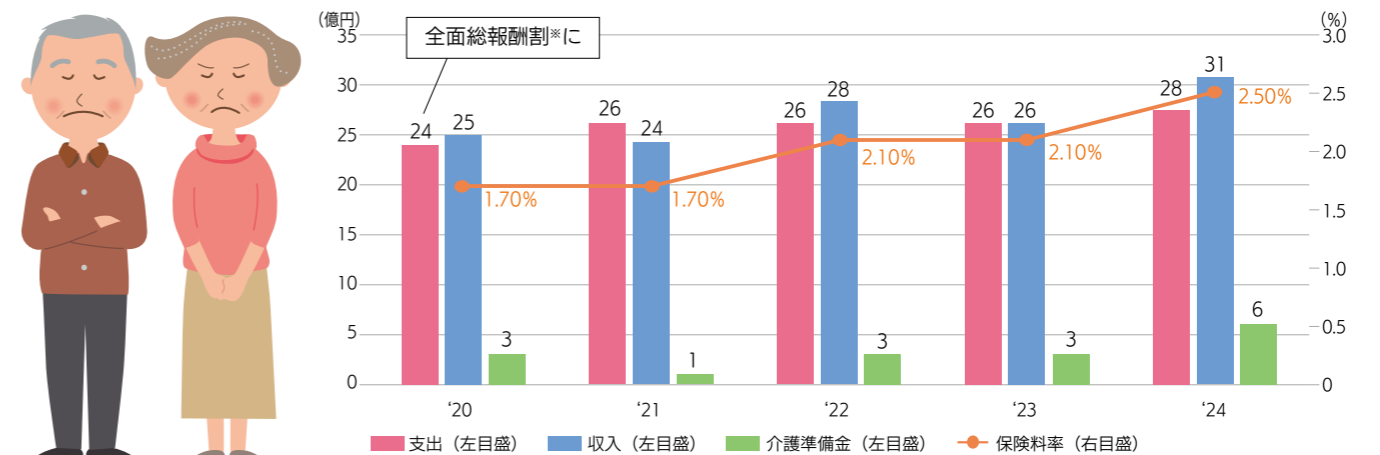
介護保険の運営主体は、市町村及び東京特別区です。健保組合は、介護保険料を徴収し、介護納付金として国に納める役割を担っています。

高齢化の進展に伴い介護費用は年々増大しており、介護納付金も増え続けています。今年度は介護保険料率を21.0/1000に引き上げたことで、介護納付金を上回る介

護保険収入を確保できる予算となり、2023年度も収支均衡となる見込みです。

介護納付金の水準に見合った介護保険料率が必要ですが、繰越金を効果的に運用しながら、慎重に検討、設定してまいります。

●IBM健保の介護保険財政の推移 (注：2024年度は保険料率を改定した場合のシミュレーション)



※介護納付金の算定方法は総報酬割となっており、健保組合など報酬水準の高い医療保険者ほど、納付金の負担が重くなる仕組みです。